

手織り力 手織工房じょうた 東京都三鷹市

自分の感性を信じて 自由に楽しむ「さをり織り」

東京都武蔵野市と三鷹市にまたがる井の頭恩賜公園。そのすぐそばに位置する工房では、幅広い年代の人が集い、手織りを楽しんでいる。

緑が多く、鳥の鳴き声が心地よい井の頭公園に隣接する手織工房じょうたを訪ねた。ここは「さをり織り」の創始者・城みさをさんの孫、城達也さんが主宰する工房だ。工房にはコンパクトな織り機が十数台並び、大きな窓からはやわらかい陽の光が差し込んでいる。

1968年（昭和43）、城みさをさんが57歳のときに始めたさをり織りとは、決まった織り方を指すのではない。機械織りではできない、「人間が根源的に持っている感力（感じる力）で織る」手織りのことだ。名前の由来は「みさをの織り」から。現在、さをり織り人口は約10万人、日本全国のみならず世界40〜50カ国に広がっている。達也さんは、大学卒業後、森永乳業での社会人生活を経て、12年前に工房を開設した。「子どもの頃から織り機に触れ

ていました。自分で初めて最後まで織ったのは22歳のとき。社員寮の狭い部屋に織り機を置いて、6mの黒い経糸で、マフラーをひたすら気ままに織りま

した。縮み方は無茶苦茶、糸も出てるし途中で切れています。が、何も気にせず織りました」と笑顔で語ってくれた。祖母のみさをさんも、自身が

織った帯を見た機屋に「一本経糸が抜けているから傷ものだ、二束三文だ」と指摘され、それならいっそ経糸を10本くらい抜いた帯を織ったことがあったという。その自由さが大阪の老舗呉服屋で評価され、みさをさんの織った織物は全て買い取ってもらえた。

に刺激しい、織りの世界を広く深くしていくことを心掛けています」

達也さんは、吉祥寺で毎年11月に行われるイベント「糸ノまつり」の発起人でもある。

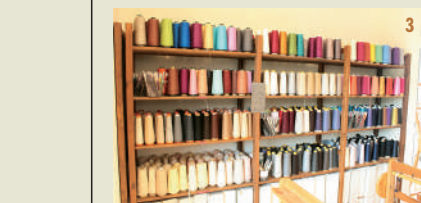
「吉祥寺は手芸店やギャラリーが多いまちで、有名な糸屋さんや原毛（げんもう）屋さんの東京支店は吉祥寺にありつたりしています。手づくり文化が発達している吉祥寺というエリアで、日にちを決めて、みんなで糸モノつながりのイベントをしましように、知り合いの9店舗に声をかけたのが始まりです」

「他に、いまやりたいのは、東京織りんびくく」です（笑）。工房前の運動場で、世界中から織物に関わる人が来て、何かイベントができたらなあ」と

自由でユニークな発想が次々飛び出してくる。

「アイデアが出てくるようになったのは、さをり織りをやっているからです。既成概念を捨てて街を歩くと、自然と感覚がはたらいってくるんです」

織物と聞くと敷居の高いイメージがあるが、ここでは誰もが手軽に始められ、自由に織れる楽しさを教えてくれる。まずはその魅力に触れてみませんか。（大西香織）



1 基本の織り方だけ教わると、あとは自分の感性に従い自由に織り上げていく。2 工房に「スタッフ」はいるが「先生」はいない。3 綿やリネンなどカラフルな糸が壁一面に並ぶ。次はどの色で織ろう、と楽しみが広がる。